

〔中〕 令和五年度 久留米大学附設中学校入学試験問題

国語科

注意 1 解答はすべて解答用紙に記入せよ。解答用紙だけを提出すること。

2 〔一〕から〔四〕の設問で、字数を指定している場合は、句読点などを含んだ字数である。

〔一〕 解答用紙全2の1に答えよ。

〔二〕 後の問いに答えよ。

問一 「手」と「足」からはじまる言葉について、国語辞典に次のような説明があった。

(1) 空欄A、Dに入ることばを平仮名で答えよ。
(2) 「手とり足とり」のように「手()足()」という言い回しがあるものをA、Dから二つ選び、記号で答えよ。

手(A) : 物によじのぼったりする時、体を支えるため手をかける所。転じて、捜索や調査を進める糸口。
足(A) : 次の行動に移るために設ける足場。

手(B) : 囚人などの手にはめて、自由に行動させなくするための道具。
足(B) : 昔、罪人の足にはめて自由を束縛した道具。転じて、足手まといになるもの。

手(C) : …うでまえ。能力。
足(C) : …二人以上の人が一緒に歩く時の、足のそろい具合。歩調。

問二 次のア、エの傍線部のうち、言葉のはたらきが他の三つと異なるものを選び、記号で答えよ。

- (1) ア 走り**は**じめる イ 走り**つ**づける
ウ 走り**ま**わる エ 走り**つ**かれる
- (2) ア 聞いて**み**る イ 聞いて**や**る
ウ 聞いて**お**く エ 聞いて**あ**るく
- (3) ア 取り**あ**げる イ 取り**か**かる
ウ 取り**し**まる エ 取り**つ**くろう

問三 次のア、オの中で、表現上のまちがいがあるものを全て選び、記号で答えよ。

ア 私がこの本を読んだのは友達も読んで面白かったからです。
イ なかには好きな野菜もあるけれど私はあまり野菜が嫌いだ。
ウ 新学期がはじまって私も何か新しい目標を立てようと思う。
エ 職員室にも行きましたが先生はいらっしゃいませんでした。
オ あなたの声は遠くからでもまったく聞こえるくらい大きい。

問四 次の空欄A、Cに入る、「き」と読む漢字を答えよ。

時(A) はずれの桜
入学試験の時(B)
時(C) をうかがう

問五 次のア、オの二組のことわざのうち、例のような関係にないもの一つを選び、記号で答えよ。

- (例) 「善は急げ」と「急がば回れ」
- ア 「氏より育ち」と「血は水よりも濃し」
- イ 「喉元過ぎれば熱さを忘れる」と「盗人を捕らえて縄をなう」
- ウ 「二度あることは三度ある」と「柳の下のどじょう」
- エ 「三人寄れば文殊の知恵」と「船頭多くして船山に上る」
- オ 「果報は寝て待て」と「まかぬ種は生えぬ」

〔三〕 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。なお筆者は、長年校正(印刷物の文字・内容を直すこと)に携わっている校閲者である。

① 「パンダの尻尾は白いですよ」と聞いた瞬間、これまで担当した書籍の数々が走馬灯のように頭に浮かびました。過去読んだゲラにパンダの後ろ姿の写真やイラストレーションがあっただろうか。あったとして、尻尾の色を確かめた覚えがない。自分も尻尾の黒いパンダを見逃していたのではないだろうか。

本の装画に尻尾の黒いパンダを描いてしまったイラストレーターの話聞いたときのことです。さいわい、重版で修正できたから話せたということでしょうか。自分が担当だったら、カバーまわりの校正時に拾えたか。なんの疑問も持たずに通してしまったのではないかと思えます。

② その場でスマートフォンから「コトバンク」を開いて「パンダ」を検索すると、『日本大百科全書』に「体毛は、黒色と白色のツートンカラーで、目の周り、手と前後肢および前肢から肩の上、頸(くび)の背面までは黒色、ほかの部分は白色」(傍点は引用者)とあります。『デジタル大辞泉』にはもっと簡潔に「毛色は白と黒の染め分けで、目の周囲と耳、肩から前肢にかけてと後肢が黒色。いずれも「黒くない部分は白」という書き方です。『広辞苑』の写真は上体をねじってこちらを見ているところ、『日本国語大辞典』のイラストレーションは後ろ脚を前に投げ出して座り、竹をくわえているところで、いずれも尻尾は見えません。二〇二二年六月に双子のパンダが生まれたばかりの東京・上野動物園には、パンダの情報だけを集めたサイト「DENOPANDA.JP」があります。上野動物園で飼育されているレキダイのパンダの名前やプロフィール、Q&Aなど充実していますが、掲載されている写真のほとんどは正面、それも顔がアップになったもの。尻尾の色や形がはっきり写った写真がなかなか見つかりません。

DENOPANDA.JPと同じく東京動物園協会による「東京ズーネット YouTube チャンネル」には、パンダに限っても二百本以上の動画がアップロードされています。上野動物園で生まれた双子のパンダ、シャオシャオとレイレイの動画を遡(さかのぼ)って見ていくと、出産直後は丸裸でネズミのようですが、生後一カ月ほどで毛がはえそろう、動くぬいぐるみさながらになります。小さなお尻にひよろりと突き出した尻尾はたしかに白。

これが仕事なら、もう少し説得力のある典拠が欲しいところですが。動画から尻尾の写っているシーンをキャプチャしてもいいのですが、もっとはっきり「パンダの尻尾は白」と断言している資料や写真はないだろうか。近所の図書館へ出かけてみることにしました。

図書館のレファレンスではまず参考資料室へ行き、百科事典や動物図鑑を引いてみるのが定石でしたが、今回は『日本大百科全書』や『世界大百科事典』はすでに調べているので、まっすぐ一般書の書架をめざします。多くの図書館では本はNDCに従って分類されていますから、動物について調べるなら「4 自然科学」の書架で「動物学」の480、489のラベルが貼られた本を見ればよい。さらにいえば『日本大百科全書』でパンダが「食肉目クマ科」であることがわかっていますから、「489 哺乳類」の中で「489・5 食肉目」「489・57 クマ科」と細分類をたどっていけば、パンダについて書かれた本が見つかるはず。しかし、480、489をざっと眺めてみても、パンダについて書か

れていそうな本は見当たりませんでした。貸出中かもしれない。児童書のフロアに行ってみることにします。写真や図解を見たいときは大人向けの本より児童書のほうが参考になるというのも、図書館員時代に学んだことです。

書名に「パンダ」を含む本の中から『パンダもの知り大図鑑 飼育からわかるパンダの科学』（誠文堂新光社）を開くと、「パンダの体のつくり」というページに「目」や「耳」「あし」に並んで「しっぽ」の項目があります。「しっぽは大人の小指くらいの長さで太さしかありません。しっぽにはあまり毛が生えていません。しっぽに見えるのはほとんど毛なのです」。そしてネンガンの「パンダのお尻の写真」がありました。『パンダもの知り大図鑑』はオールカラーでパンダの生態や体のしくみ、飼育方法などが詳細に解説され、写真もさまざまな角度やポーズのものが載っています。インターネットを画像検索したときには見つけれなかったバラエティです。最後のQ&Aの章は写真でなくイラストレーションが使われ、尻尾の白いパンダがページのそこかしこに。これなら今後ガラに尻尾の黒いパンダが出てきたときにも、堂々と鉛筆を入れることができます。

校正もレファレンスサービスも「調べる」ことが大きな割合を占める仕事です。これらの仕事を続けてきて思うのは、曲がりなりにも専門家である自分たちが、かつていままも、とりたてて特別な道具を使っているわけではないということです。いまならわざわざ図書館まで足を運ばなくても、パソコンやスマートフォンがあれば『日本大百科全書』や『デジタル大辞泉』が利用できる無料ウェブ百科事典「コトバンク」にアクセスできます。Googleの画像検索・動画検索機能を使えば写真や動画を見られますし、もっと詳しく書かれた記事や本を探したいと思ったときにもインターネットはおおいに助けになります。近場で手に入らない本や雑誌を手に入れることも、オンライン書店や図書館のインターネット予約システムの発達によって容易になりました。「調べる」ことを仕事にしてきた人間として、「調べる」ためのハードルはどんどん低くなっているというのが実感です。二十年前、十年前と比べると、「調べる」ことは誰にとっても身近な行為になっている。

校正において「調べる」ことも、特別な技術だとは思っていません。わたしは凡庸な人間です。ガラを読んでいて即座に「事実と違う」と看破できるほどにもものを知っているわけではありません。ガラにカワウソの肉球の数が書いてあったら実際何個あるのか調べるのは、イギを唱えたいわけでも知識をひけらかしたいわけでもなく、たとえカワウソの専門家であっても間違えることがあるのを知っているからです。調べた結果とガラが異なっていたら、なるべく複数の、信頼できそうな資料を選び、典拠として提示しながら、いま一度確認いただけませんか、と編集者と著者に注意を促す。そこまでが校正の「調べる」です。

校正者の調べ方が人と違って見えるとしたら、仕事でさまざまなジャンルの調べものを経験していることで、調べることに人よりいくぶん慣れているからではないでしょうか。わたし自身、はじめからスムーズに調べられていたわけではありません。右も左もわからない中、会社の書架に並んでいる資料を端から順番に全部引いてみるというようながむしやらかなやり方から始めて、徐々に慣れていった。いまでも思うように資料が見つからない、いくら調べても答えがはつきりしない、たったひとつの疑問を解決するために何日もかかってしまうなんてことはしょっちゅうです。

調べることには段階があります。ガラを読んでいて疑問が生まれ、何を使って調べるか考える。しかし「調べる」始まりはそこではなくて、まず「疑う」ことなのです。「パンダの尻尾は白い」という典拠を示す

ことは、これまで書いてきたようにそれほど難しくありません。でも、尻尾の黒いパンダを見たときに「パンダの尻尾の色は黒でよかった？」と思えなければ、そもそも調べることもできない。校正の技術として「調べる力」があるならば、さらに求められるのは「疑う力」であるともいえます。（牟田都子『文にあたる』より）

（注）ガラ……校正用に刷った文章。

重版……同じ書物の版を重ねること。
NDC……日本十進分類法。図書の分類方法。

問一 傍線部①『パンダの尻尾は白いんですよ』とあるが、この時の筆者の心情はどのようなものか。その説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 初めてパンダの尻尾が黒ではなく白であると知り、その事実衝撃を受けるとともに自分が長く誤解してきたことを恥ずかしく思う気持ち。

イ パンダの尻尾の色という、今まで注意することがなかった事柄に触れ、はやく資料やイラストでその真相を知りたいと落ち着かない気持ち。

ウ 自分が見てきた多くの書物の中で、尻尾が黒いパンダがあってもそれに疑問を持たず、校正をせずに出版してしまったものがあるのではないかと不安に思う気持ち。

エ パンダの尻尾が白だと知ったため、自分がかつて校正した文章で誤った情報を流し、多くの人に誤解を与えてしまったのではないかと心配する気持ち。

オ 自分もパンダの尻尾の色など気にしてこなかったため、間違って尻尾の黒いパンダを描いてしまったイラストレーターに同情する気持ち。

問二 傍線部②「その場でスマートフォンから『コトバンク』を開いて『パンダ』を検索する」とあるが、この後の筆者の調査について、表にしてまとめてみた。

| 調べる項目 | 「パンダの尻尾は白いかどうか」 |
|-------|--|
| 順 | 方法 |
| I | インターネット 「コトバンク」などの辞典 |
| II | 上野動物園のパンダの動画 図書館 一般書 |
| III | 図書館 児童書 『パンダもの知り大図鑑』 |
| 結果 | 黒くない部分は白である、と説明されている。 子どもたちのパンダの、小さなお尻の尻尾は白い。 パンダについて書かれている本は見当たらない。 |
| | (2) |

（1）筆者が調査Iで調査を終えなかったのはなぜか。その理由をわかりやすく説明せよ。

（2）調査IIIの結果を本文の言葉をつかってまとめよ。

問三 傍線部③『調べる』ことは誰にとっても身近な行為になっている」とはどういうことか、答えよ。

問四 傍線部④「校正者の調べ方」について
（1）筆者はどのような点で「校正者の調べ方」が一般の人の「調べ方」と異なっていると考えているか、答えよ。

（2）次の文は「校正者」について述べた、ある作家の文章である。
漢字や言葉遣いの間違いだけではない。年号を勘違いする、三輪車の構造をでたらめに説明する、東西南北が入り乱れる、カワウソの肉球の数を間違える、季節はずれの花を咲かせる……。私はありとあらゆる間違いを犯す。けれど校閲者は、「こんなことも知らないのか」というあきれた気配は微塵も見せない。どの赤字にも、どの「？」マークにも、「ここ、もう一度考え直されたいかがでしょうか」とき

さやくような謙虚さがこめられている。時には三輪車の図解や地図やカワウソの写真のコピーが、そっと添えられている。

(小川洋子『とにかく散歩いたしましよ』より)

波線部「ささやくような謙虚さ」とあるが、「校正者」の「謙虚」な態度とはどのような態度か。その説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア どんな専門家でも間違えることがあると分かっている、筆者の側に立ちつつ間違いを指摘し、より正確な文章・イラストを読者に届けようとする態度。

イ 間違えている箇所をことさらに強調するのではなく、間違えている可能性をそれとなく示すことで、作家やイラストレーターのプライドを傷つけまいとする態度。

ウ 文章・イラストの中にあるはずの、誰も気づいていない誤りを発見して正しいものと訂正し、誤りがなくなつてから出版したいと強く願う態度。

エ 誰もが間違いを犯してしまうと知っており、間違いを発見してもそれを直接知らせるのではなく、作家自らが気づいて修正するよう導いていく態度。

オ 専門的な資料だけで決めつけてしまわず、誰でも手に入れることのできる児童書やインターネットなど一般向けの資料も参照して正解を出そうとする態度。

問五 傍線部⑤『調べる』始まりはそこではなくて、まず『疑う』ことなので」とあるが、なぜ「疑う」ことが「始まり」なのか。それを説明した次の文の空欄を埋めよ。

ある記事を校正するときに、から。

問六 二重傍線部 a、b、c、d のカタカナを漢字に直せ。

a レキダイ b ダンゲン c ネンガン d イギ

問七 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

ぼく(優太)は小学四年生。午前中雨が降っていた日曜日の屋下がり、同級生の良と公園のベンチに座っていた。二人には父親がいなという共通点がある(優太は離婚、良は死別のため)。なお、優太の母が父親の写真をすべて捨ててしまったため、優太は父親の顔を覚えていない。本文は「父親なんて薄情なものなんだって」という母親の言葉を、優太が良に語った直後の場面である。

「エ、エ、エッヘン」

せきばらいがとなりのベンチからきこえた。

良「ごしにみると、いつのまにかおじさんが一人すわっていた。ぶあついめがねをかけて、すごい猫背だ。あぶらっけのない今起きましたみたいなぼさぼさの髪に白髪がまじっている。若いような年寄りのような年齢がぼくにはよくわからない。散歩のちゆうでちよつと一休みしているようにもみえる。でも、傘がそばにあるところをみたら、雨がふっているところから歩いてきたのかもしれない。

ぼくたちが、おじさんの方をみたのがわかると、
「君たち、おやじ検定って知ってる?」
「うん、正面をむいたままきく。」

「なに、おやじ検定って?」

「英検とかは、きいたことある」

ぼくと良はささやきあつた。

「父親にだけある検定試験だそうさ。まあ、きいた話だけだね」

おじさんはふつと笑った。正面をむいたままだ。キャッチボールしている親子から目をはなせない様子だった。

「ほら、もつと大きくふみこんで!」

なんて息子にいつてる。

「おやじ検定のことをはなしてもいいだろうか?」

おじさんは、ぼくたちの方をみないできいた。

ぼく一人だけならさつさとベンチからたつて、こんなおじさんからは

なれてた。でも、良がいた。キャッチボールしている親子もいる。広場のむかいにあるベンチにも何人かすわっている。ベビーカーをおしてお母さんたちが目の前をとる。

それにまだ家へ帰りたくなかった。日曜日だけど、母さんは仕事だ。家へ帰ってもぼく一人だ。きつと良もそうだったんだと思う。良がぼくをちらつとみた。ぼくはうなずいた。

父親のいないぼくらには、おやじ検定ってなんだろうって、気になつたのかもしれない。

「ど、どうぞ」

良がいった。

「あんな時だ」

おじさんが、キャッチボールをしている親子にあごをしゃくつた。

「あんな時におやじ検定が突然始まるらしい」

おじさんは、そうなんだというようにうなずいた。

「あんな時って、パパと子どもがキャッチボールする時ですか?」

良が首をかしげた。

「そうだ。父親と子どもがなにかする時だ」

おじさんはうなずいた。

「よくあるよね。サッカーのドリブル練習とか自転車の練習にパパがつきあうのって。あと、登山へ行くとか、釣りに行くとか。勉強をみてることもあるかな」

良がかぞえあげる。

良は、そんな父子をうらやましいってみていたのになつて思った。

ぼくは、スキー板をかついで、

「行くぞ。ぐずぐずすんな!」

ってどなっている父親と、うなだれて足をひきずるようにしてついていく息子を駆でみたことがある。着なれないスキーウェアに重そうなスキー板をかついだ息子は泣きそうにみえた。きつと家でゲームでもしていたかっただらうな。父親がはりきっているのに、息子はちつとも楽しそうじゃない。ぼくは、息子に同情してしまった。

キャッチボールしているお父さんは、

「だめだだめだ! 腕だけで投げな。もつと腰をいれて肩をまわすんだ!」

って、どなっている。

「子どもは迷惑なだけかも」

ぼくは、鼻で笑った。

「そうなんだ。そんな時にジャッジマンがあらわれるらしい。あの父親にももしかするとジャッジマンがみえているのかもしれない」

おじさんは目をこらす。

「なに、それ?」

ぼくと良は顔をみあわせた。

「紺色のブレザーをきた小人がちよこちよこ出てくる。それがジャッジマンだ。ジャッジマンは父親のすることを見て、よしって判定すればワンプointって白い旗をあげてくれるそうさ」

おじさんの目はキャッチボールしている親子から、はなれない。みつめていれば自分にも、そのジャッジマンがみえるというようにだ。

ぼくは、うそだ! っていうたいののみこんだ。

良は、そんなおじさんをじつとみている。

ぼくは、変なおじさんにつかまってしまったぞ。逃げようっていうように、良をつついた。なのに、良は、ぼくをみるとうんとというようにうなずくだけだ。うなずいてないで逃げようって、またつついても、にっこりうなずくだけなんだ。

おじさんは、ぼくたちの様子に気づくこともなく、

「あの父親にはジャッジマンが白い旗をあげたのかもな」

とつぶやいた。

キャッチボールしていた息子は、もういやだつていうようにグローブ

をはずしました。

「どうした？ まだ時間があるだろ」

お父さんは、うんざりしている息子に気がついていない。

その様子をみていた良が首をかしげた。

「どうしてですか？ あれで、よしっなんですか？ ただどなってただけじゃないですか。どなるのをこらえて、もつと上手に投げられるようにしてやってワンポイントだったらわかるけど」

良は、おかしいじゃないかといいたいらしい。良のいうとおりだ。息子の投げるボールは、ひよろひよろしたままだ。始めたころと変わりは

ない。
良は、まだこのおじさんにつきあうつもりのようなのだ。ぼくも、少しだけ、この変なおじさんのはなすおやじ検定に興味が出てきた。②③、なんで、あれでワンポイントなのかわからない。

「あれでいいんだろうさ、きつと。子どもの気持ちは最初っから無視だ。おやじ検定だもの。子どもにしたら迷惑なだけだろうな。自分が子どもだった時のことを思い出せば、あんな父親はうるさいだけだったってわかってる。なのに、それを忘れてしまう。おれはこいつの、おやじだ！ これをしてやらなきゃいけんのだ！ って思う。我を忘れるっていうのかな。その気持ちをおしつけてしまう。父親だからなんだろうな」

おじさんはため息をついた。

「ボールの投げ方だって、他人ならもつとていねいにわかりやすく教えてくれる。あの父親だって、他の家の子どもになら、もつとちがった教え方ができるんじゃないかな」

おじさんは苦笑いをした。

「ぶきつちよになつちやうつてことかな？」

良が、うなずいた。

「あ、そう。ぶきつちよさかげんをはかるのが、おやじ検定なのかもしれない」

おじさんは、わかってくれたかというように、うなずく。

「今は、ジャッジマンの判定もゆるいんだろうな。昔の父親なら、息子に、無理やりまだキャッチボールさせてるだろう。でも、ああやってうさがられながら父親になっていくんだと思うよ。今はパパ検定っていう方がいかな」

おじさんは、キャッチボールをやめて、すねてしまった息子の肩をだきながら帰る父親をみおくっている。

「はなしをきいてくれてありがとう」

④ おじさんはベンチから立ちあがった。

「おじさんのジャッジマンはみえましたか？」

良も立ちあがってきく。

ぼくは、良がいいまちがったのかと思った。あのキャッチボールしている父親のジャッジマンがおじさんにもみえたのかつてききたいんじゃないのか？

おじさんは、なにもいわなかった。

⑤ 良が右手をたかくあげた。ジャッジマンが白い旗をあげるみたいに。

「おじさんにワンポイント！」

おじさんは、ゆっくりとほえんだ。そして傘をもつて歩き出した。ふりむきはしなかった。ぼくには、ずっとおじさんの顔は横顔しかみえなかった。

「優太君、おいかけていいの？」

良がぼくとおじさんの背中をみくらべる。

どうしておいかけていけないのか、ぼくには、わからなかった。

「あの人、優太君のパパだよ」

思いもかけないことをいわれて、ぼくの頭の中は真っ白になった。

「ま、まさか——」

「優太君に会いにきたんだ。でも、パパだっていいだせなかったんだよ。だって、今まで優太君と会ったことないだろうし。きつとここで、優

太君だってわかったんだ。でも、優太君、父親なんて薄情だなんていつてるし。だから、なにか父親に関係することにはなさないやあって、思ったんじゃない。ほんと、ぶきつちよだよ。でも、ぼく、おもしろかったし、うらやましかつた。今日、おじさんが優太君に会いにきたことが、優太君ちのパパの検定だった。ぼくはそう思った」

良は、ほらもう公園を出ていくつていうように、頭をめぐらす。

「そ、そんな——」

「会いに来てくれたんだもの。それだけでワンポイントだよ。似てたよ。優太君、あの人に似てるよ」

良の言葉につきとばされるように、ぼくはかけだしていた。公園から出たけど、おじさんの姿はなかった。

「おお、優太、サッカーしようぜ」

同じクラスの仲間が二、三人やってきた。

「公園に、だれかいいる？」

おじさんをさがして何をきくんだって思った。父さんだって、わかっ

てどうしたらいいんだろう。

「うん。良君がいる——」

ぼくは公園にもどった。 (柏葉幸子『18枚のポートレート』より)

問一 傍線部①「ぼくはうなずいた」とあるが、このときの「ぼく」の

気持ちの説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 友人の良やキャッチボールをしている親子など、多くの人が周りにいたので安心して話が聞けるといふ気持ち。

イ ぶ厚いメガネをかけ、猫背でぼさぼさの髪、という風変わりなおじさんに興味をわき、話を聞いてみようという気持ち。

ウ 初対面だが丁寧なおだやかに話しかけてくるおじさんに好意を持ち、話だけなら聞いてもよいという気持ち。

エ 家へ帰っても、ぼくも良もどうせ一人ぼっちだし、良や他の人もそばにるので、このおじさんの話を聞いてもよいという気持ち。

オ おやじ検定とはどのようなものかということが強く気にかかり、興味をわいたので、話を聞いてみようという気持ち。

問二 傍線部②「なんで、あれでワンポイントなのかわからない」とあるが、「優太」はなぜそう思ったのか。それを説明した次の文の空欄Ⅰ・Ⅱを、それぞれ指定の字数で埋めて答えよ。

優太には、その子がⅠ 十字以内、しかもⅡ 二十字以内、ように見えたから。

問三 傍線部③「あの父親だって、他の家の子どもになら、もつとちがった教え方ができるんじゃないかな」とあるが、なぜか。それを説明した次の文の空欄Ⅲ・Ⅳを、それぞれ指定の字数で埋めて答えよ。

他の家の子どもに対してはⅢ 二十字以内、という気がいなくな

り、Ⅳ 漢字二字 に指導できるから。

問四 傍線部④「おじさんのジャッジマンはみえましたか？」とあるが、

どういうことか。分かりやすく説明せよ。

問五 傍線部⑤「おじさんにワンポイント！」とあるが、「良」はなぜ

そう言ったのか。簡潔に答えよ。

問六 傍線部⑥「ぼく、おもしろかったし、うらやましかつた」とあるが、この時の「良」の気持ちを説明した次の文の空欄Ⅴ・Ⅵを、それぞれ指定の字数で埋めよ。

「おじさん」の「優太」に対する態度が、まさにⅤ 五字以内の本

文中の言葉でⅥ 十字以内の自分の言葉で

という点でうらやましかつた。

問七 波線部「正面をむいたままきく」、「正面をむいたままだ」、「ぼくたちの方をみないできいた」とあるが、この「おじさん」はなぜ

「優太」と「良」の方を見ずに話しているのか。分かりやすく説明せよ。

*の欄には記入しないこと

受験番号

□ これから読まれるのは、「勉強に集中するにはどうしたらいいですか？」という小学生の相談に対して、脳科学者の池谷裕一が答えている文章です。よく聞いて、後の問いに答えなさい。
なお、読まれるのは一回だけなので、解答欄の余白にメモを取りながら聞きなさい。

問一 「身体」がくたびれると、「脳」にどのような影響があるか、説明せよ。

問二 本文で紹介されている「実験」は、何と何を比べることで、どのようなことを調べるための実験か、説明せよ。

問三 実験における「六十分間」の中で、「グループA」と「グループB」の集中力はどのように変化したと考えられるか、それぞれ説明せよ。

問四 筆者は、小学生の相談に対して、どのようなアドバイスをしているか、説明せよ。

問一

| |
|--|
| |
|--|

問二

| |
|--|
| |
|--|

問三

| |
|--|
| |
|--|

問四

| |
|--|
| |
|--|

*

「集中力が切れた」と実感するのは、頭がぐーっとモヤモヤしたときや、だるくなったときだと思えます。これらは身体がくたびれているサイン。ちなみに、脳は勉強したぐらいでつかれるようなヤワなものじゃありません。休むことなく脈打つ心臓と同じように、脳はいつも元気に活動しつづけています。

ただ、身体はどうしたってくたびれてくる。ずっと同じ姿勢でつくえに向かっていたら、おしりや腰の筋肉はかたまって、えんぴつを持つ手もだるくなってきます。

じつは、ポイントはここにあります！ 身体の動きが止まると、脳は退屈してきます。脳は頭蓋骨のなかに閉じこめられているので、外からの刺激がないと元気に活動できないからです。

さて、ここで、ぼくが教育関係の会社といっしょにおこなった実験を紹介しましょう。中学1年生の生徒さんを集め、グループをつぎのように2つに分け、英単語のテストをしました。

グループA 同じ場所で、休けいなしで60分間学習する

グループB 45分を15分×3の3回に分け、合間に7分半の休けいを2回はさんで学習する

学習する英単語は中学2・3年生レベルのものです。学習の前にテストをおこない、その結果からどのくらい点数が伸びたかを調べたところ、グループAのほうが、グループBよりも点数が高いという結果が出ました。ところが、翌日の点数はAとBが逆転。1週間後のテストでもグループBのほうがよりよい成績を残しました。これは、学習内容を長期的に脳に定着させるためには、学習の合間の休けいが効果を発揮する可能性を示しています。

グループBのほうがグループAよりも学習時間が「短い」にもかかわらずいい結果を残した、というのも興味深い点です。

この実験では、学習しているときの脳波も計測しました。集中力に関係している脳波は、脳の「前頭葉」という場所の「ガンマ波」だと考えられ、これが集中力の目安になります。計測の結果、グループAは時間の経過とともにガンマ波のパワーが低下し、とくに40分をさかいに急激に下がっていました。集中力がつづくのは40分ほどとも考えられそうです。一方、グループBは休けいによってパワーが復活し、学習のあいだ一定の集中力を維持することもわかりました。

以上のことをふまえてぼくがおすすめるのは、家のなかに勉強するスペースを複数用意しておくこと。自分の勉強づくえのほかにも、たとえば床に座って読み書きができるミニデスクのコーナーをつくっておく。家族のじゃまにならなければ、ダイニングテーブルやリビングテーブルに移動してもよし。「ノマド(遊牧民)」のようにいろいろな場所に移動して、そのついでにストレッチ運動など、短い息抜きの時間をとりましょう。

(池谷裕二『モヤモヤそうだんクリニック』より 一部変更あり)